

# 「日本語教育の現状と課題」の実践報告

## — 日本語教育の諸相を知る・見る —

蓑川 恵理子

「日本語教育」という言葉を聞いたことがある、また実際に大学の日本語教育コースで学んでいる、という大学生が、日本語教育が置かれている現状についてどのくらい知っているだろうか。これは、大学生についてだけ問うべきことではなく、日本に住んでいる私たちすべてについて言うことである。最近、町でよく見かける観光客ではない外国人、公立小・中学校に在籍する外国人児童・生徒など、私たちの身近に外国人がいることが当たり前になった。しかし、直接知り合いでないと、身近に外国人が暮らしているということは実感しにくい。そこで、さまざまな角度から、日本における日本語教育、外国人に関する話題を取り上げ、実際に日本で暮らす外国の人々が日本語を勉強している姿を見るを通して、科目名の「日本語教育の現状と課題」を知り、考えるきっかけを作ることを試みる。

キーワード：地域の日本語教室、国際交流センター、日本語学校、留学生、ボランティア

### 1. はじめに

「日本語教育の現状と課題」という科目を受け持つにあたり、その内容と方法について検討した。「日本語教育」とは、そのことばの通り、「日本語を教える」ことである。では、「日本語を教えることの現状と課題」とは何だろうか。実際に日本語を教える方法を知ることや体験することが挙げられるだろう。また、広く「日本語教育」という言葉が指し示す、社会的な諸問題を紹介するということも考えられる。そこで、他に開講されている「日本語教育学概論」や「日本語教授法」と、内容が重複しないよう配慮し、日本語教育が置かれている、社会的な状況を学生に知ってもらうことに重点を置くこととした。

次に、日本語教育が置かれている現状とは何か、ということと、それをどのような方法で学生に伝えるかということが問題となる。初めから専門書の内容を講義すると、抵抗がある学生もいるのではないかと考えられた。そこで、雑誌の記事を取り上げることとし、『月刊 日本語』から、日本語教育の現状を伝える、なるべく新しい記事を探し、2011年11月号の記事を選んだ。

また、次節で触れるが、日本語教育コースに所属しない学生も受講するため、日本語教育についての予備知識がなくても授業に参加できるように工夫した。具体的には、学生が実際に体験することや、当事者の話を聞くことなど、見学を取り入れた、講義に偏らない、興味を持ちやすい授業を行うこととした。具体的には、日本語教育に関心を持たせるため、漫画の講読やドラマの視聴も

行う授業を計画した。以下に2年にわたる（半期の授業を2回）授業の実践を報告する。

### 2. 授業の概要

「日本語教育の現状と課題」は、D類人間発達科学課程日本語教育コースのコース基本科目、同じくD類人間発達科学課程人間発達科学コースのコース選択科目として、1年生後期から4年生を対象に開講されている。筆者は、2012年度から担当し、受講生の内訳は以下のものであった（2013年の日本語教育コースの受講生には留学生1名を含む）。

表1：受講生の内訳

|           |     | 2012年 | 2013年 |
|-----------|-----|-------|-------|
| 日本語教育コース  | 2年生 | 9     | 10    |
| 人間発達科学コース | 2年生 | 8     | 1     |
|           | 3年生 | 2     | 0     |
| 合計        |     | 19    | 11    |

教科書的なものとしては、前節で挙げた『月刊 日本語』2011年11月号掲載の「6つのテーマで考えよう 日本語教育のこれから—政策と実践」<sup>1)</sup>と、日本語教育政策マスタープラン研究会（2010）『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』を採用した。

### 3. 2012年度の授業実践

#### 3.1 日本語教育の現状を知る

先に挙げた『月刊 日本語』<sup>1)</sup>の記事では、次の六つ

三重大学教育学部国語教育講座

のテーマについて、それぞれ約 700 字程度で説明がなされていた。

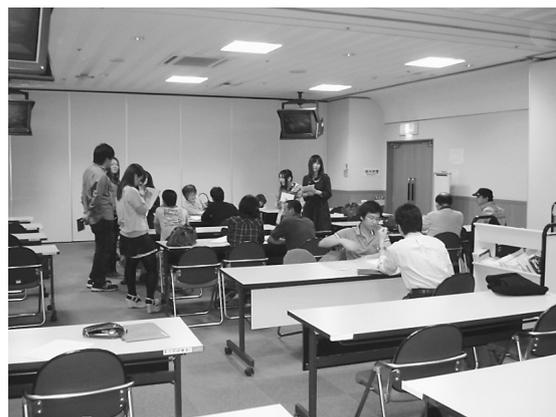
- ① 震災後の日本…震災後に外国人登録者数が減少したこと、特に被災 3 県では、減少幅が大きいことが述べられている。
- ② 外国人集住都市会議…ニューカマーと呼ばれる南米日系人を中心とする外国人住民が多く居住する都市が集まり、外国人住民に関する施策について情報交換を行うことを目的に、設置された会議である。そして、三重県でも津市・四日市市・鈴鹿市・亀山市・伊賀市が参加している（参加都市は全部で 28 都市）。
- ③ 外国人留学生…文部科学省・外務省など六つの関係省庁が連携し、2020 年をめどに留学生 30 万人の受け入れを目指す政策について、説明されている。「グローバル 30」という政策が掲げられたが、民主党政権の誕生によって、「一旦廃止、組み立て直し」に仕分けられてしまった。しかし、30 万人受け入れという基本方針は変わらないという。
- ④ 高度人材…経済がグローバル化する中、国際的に活躍できる人材の獲得競争が、世界中で激化している。日本でも、少子高齢化、人口減少社会を迎え、「高度人材」といわれる、専門知識や技術を持った外国人の受け入れ推進が重要課題になっている。
- ⑤ EPA 看護師・介護福祉士…EPA（経済連携協定）に基づき、看護師・介護福祉士の受け入れが 2008 年から始まった。インドネシアやフィリピンから候補者が来日しているが、日本の国家試験の合格率が低く、彼らに対する日本語教育や専門知識の教育が問題になっている。
- ⑥ 日本語教育振興法案…日本語教育の重要性が高まっているが、長期的展望に基づいた一貫性のある日本語教育政策が整備されていない。そこで、現場で起きている問題を洗い出し、日本語教育政策の長期的・包括的計画を作成するワーキンググループが発足した。

以上の六つのテーマについて簡単に説明を加えたのち、学生に興味あるテーマを選ばせた。次回の授業で、さらに詳しく調べたことを、口頭発表させた。そのあとテーマ別にグループに分かれ、討論を行った。

### 3.2 日本語教室の見学－見る－

学生の都合により、5 月 8 日は津市国際交流協会、久居支部の日本語教室「日本語ひろば」を、6 月 10 日は津市国際交流協会、津支部「日本語教室」を見学した。見学者は、久居が 10 名、津が 9 名だった。

久居は火曜日の夜、津は日曜日ということで、無償で教えるボランティアの方や、仕事が終わって、または、



久居の「日本語ひろば」見学の様子 2012.5.8



津の「日本語教室」見学の様子 2012.6.10

仕事が休みの日に勉強する学習者の方々の姿を、実際に見たことは、学生たちの意識に何かしら影響を与えたようである。

見学後は、授業の中で報告を行い、レポートを提出させた。

### 3.3 国際交流センターの見学－聞く－

三重大学国際交流センターの見学を、5 月 29 日に行った。ここでは、日本語の授業の見学はできなかったが、国際交流センターの活動やどのような授業が行われているのかを、国際交流センター内の教室で、吉井美知子先生から聞いた。

見学後の話し合いや、興味を持ったこと・感想などを書かせた「学習の記録」によると、国際交流センターがあることは知っていたが、入ったことはなかった、留学生のためにあるもので、日本人学生が受講できる授業があることを知らなかった、留学に興味があった、などの意見や感想が聞かれた。吉井先生によると、入学時に同じ内容の説明は行われているそうだが、新入生は一度にいろいろな話を聞くためか、学生の記憶には全く残っていなかったようである。どの学生も吉井先生のお話の内容を、初めて聞いたと述べていた。



国際交流センター見学の様子 2012.5.29

### 3.4 「日本語教育政策のマスタープランと国立日本語教育研究所」についての講義

日本語教育のさまざまな分野に目を配り、長期的な視野に立った政策の裏付けとなる「日本語教育政策のマスタープラン」が必要であると説く。内容は、自治体、総務省、文部科学省、経済産業省、厚生労働省、外務省など各関係省庁にまたがるもので、定住外国人、外国人児童・生徒、留学生、外国人技術研修生、海外の日本語学習者、日系ブラジル人の雇用対策としての日本語教育、EPA で来日した看護師・介護福祉士に対する日本語教育などである。

それと同時に、日本語教育のさまざまな分野を長期にわたって総合的に調査研究し、データを蓄積し、広い視野に立った政策を提案することができる公的なシンクタンクが必要である。そのシンクタンクとして機能していた日本語教育基盤情報センターは、国立国語研究所の日本語教育研究部門として、「日本語教育に関する科学的な調査・研究を実施し、資料を作成する」という機能を担ってきた。しかし、2009年1月、国立国語研究所もろとも廃止するという政府法案が国会に提出された。危機感を持った日本語教育学会を中心とする日本語教育関係者らが国会議員に働きかけ、日本語教育関係者やボランティアなど一般市民から日本語教育研究部門の存続を訴える多数の請願署名が集まり、2009年10月、新国立国語研究所が発足する。(以上今村和宏(2010)より引用<sup>2)</sup>。

以上の経緯を話し、研究所といっても、学生にはあまりなじみがないため、国立国語研究所には、どのような部門があり、どんな研究が行われ、それぞれ何人の研究者が担当しているのかを、国立国語研究所のサイトをコピーして説明した。各部門、専任研究員が10人以下という少人数であり、部門によっては専任が一人であったり、併任ばかりである所もある。学生は、研究所という、もっと大規模な組織を想像していたようである。

### 3.5 日本語学校の様子—漫画・ドラマから学ぶ—

本学の近辺には日本語学校がないということと、1節でも述べたように、日本語教育についての予備知識も関心もない学生がいるため、興味を持ちやすい教材として、漫画とその原作をドラマ化したDVDを視聴した。漫画の原作本は、蛇蔵&海野凧子(2009)『日本人の知らない日本語<sup>3)</sup>』である。本作は日本語学校を舞台に、なぎこという日本語教師が主人公で、教師と外国人学生の日本語にまつわるやり取りが、軽妙に描かれている。DVD<sup>4)</sup>は、上記の漫画を原案として、2010年7月から2010年9月末まで放映された、読売テレビ日本テレビ系の同名ドラマをDVD化したものである。

漫画は、研究費で4冊購入したものを学生に貸し出し、自宅で読んで来ることとし、授業ではドラマの2回分を視聴した。その後、漫画とドラマ双方の内容について討論し、レポートの提出を課した。

日本人でも知らない日本語が多いことや、バイト敬語といわれる誤った敬語の使い方や、外国人就学生の置かれている環境などが、学生の印象に残ったようである。

また、実際の日本語学校の様子を知るために、語学関係の出版社アルクが、作成した「日本語学校の授業をのぞいてみよう!」というシリーズの中の、「東京中央日本語学院」<sup>5)</sup>などの授業風景の映像を見た。

### 3.6 年少者(児童・生徒)に対する日本語教育

本項目の1回目の授業の前半では、山田泉(2010)<sup>4)</sup>の内容を中心に、講義形式で、外国につながる児童・生徒の発達や言語の問題、また、文部科学省は、日本国籍を待たない子どもたちを「義務教育」の対象者としていないため、不就学の問題が起きていることなどを紹介した。

授業の後半では、もし自分が小学校の教師だった場合、外国人の子どもに語彙力をつけさせるにはどうすればよいか、どのような語彙から教えるべきかという課題に、グループで取り組ませた<sup>5)</sup>。

2回目の授業の前半では、野山広(2010)<sup>6)</sup>の内容を中心に、講義形式で、ダブルリミテッドの問題や、バイリンガルを意識した子どもの育成、自国語と母語の教育の、欧米と日本の事例紹介などを行った。

授業の後半では、再び、自分が小学校の教師だと仮定して、国際教室を利用して、日本人児童と外国人児童の交流と異文化理解の場にするには、どうすればいいかについてグループで討論した<sup>7)</sup>。

### 3.7 地域の日本語教室についての調査

それぞれの学生の地元、または大学近辺の日本語教室について調べ、授業の中で報告をする活動を行った。調査項目は、①日本語教室の名称、②日本語教室の場所、

③日本語教室の開催日時、④その教室の日本語教師の数、⑤学習者の人数と出身地、⑥日本語授業の形態（クラス形式かマンツーマンか）、⑦使用教材、⑧媒介語を利用するか、⑨参加費用、⑩学習者のレベル（初級・中級・上級）、⑪その地域の特色、⑫調査をして考えたこと、感じたこと、の以上12項目である。口頭発表ののち、レポートとして提出させた。

教員の予想に反して、ほとんどの学生が実際に日本語教室に足を運ばず、日本語教室のサイトで調べたり、電話で調査したりしたということがわかったので、次年度の反省材料とした。



久居の「日本語ひろば」見学の様子 A 2013.5.14

## 4. 2013 年度の授業実践

### 4.1 日本語教育の現状を知る

この内容については、昨年度と同じ雑誌記事<sup>1)</sup>を使い、その中から学生が興味を持ったテーマについて調べ、次の授業で口頭発表させ、テーマごとにグループに分かれて討論を行った。

人の発表を聞くことで、それまでの自分の視点とは異なる視点から、物事を捉えられるようになったことや、今まで知らなかった知識を得ることができた、というような感想が述べられていた。



久居の「日本語ひろば」見学の様子 B 2013.5.14

### 4.2 国際交流センターの見学－聞く－

2013 年度は、5 月 7 日に三重大学国際交流センターを見学し、前年度と同様に吉井美知子先生から、お話を聞き、その内容について考えたことを、レポートとして提出させた。

吉井先生が、日本の歌を通して、日本語や日本文化を教えていることに興味を持った、吉井先生のベトナムの大学での経験、日本人学生のための語学留学のプログラム、国際インターンシップというものがある、そのインターンシップでは特に、日本語を教える人材が必要とされている、日本人学生も受講できる英語だけの授業がある、三重大学での国際交流週間や留学生カフェ、三重大学国際ジョイントセミナーなどの行事があることなど、興味深い話題が多かったようである。

### 4.3 日本語教室の見学－見る－

2013 年度は、前年度より受講生の数が少なかったため、見学は津市国際交流協会、久居支部「日本語ひろば」一か所とし、5 月 14 日に行った。

実際に見学してみて、学生たちは、同音異義語や、オノマトペの中でも特に擬態語など、普段何気なく遣っている日本語を、学習者にわかりやすく説明することの難しさ、ボランティアの方々の苦勞などを、感じたようである。

### 4.4 国内の日本語教育の現状－知る－

できるだけ新しい話題を提供するため、今年度は雑誌『日本語学』（2013 年 3 月号）から記事<sup>2)</sup>を選んだ。記事を読み進める形で、日本語教育機関数の推移や、各機関・施設の日本語教師数や学習者数、国・地域別日本語学習者数などの、日本語教育に関わるデータを紹介した。

### 4.5 地域日本語教育－知る－

前回と同様に、雑誌『日本語学』（2013 年 3 月号）から記事<sup>3)</sup>を選んだ。1990 年代以降、急激に増えてきた日系南米人や国際結婚の配偶者などの、ニューカマーと呼ばれる人々や、在日韓国・朝鮮人を中心とするオールドカマーなど、多様な背景を持った外国籍住民に対する日本語教育について、日本の各地域ではどのような問題があるのか、日本語教育や支援を行う人々に求められる資質や能力とは、どのようなものかということなどについて述べた。

### 4.6 日本語学校の様子－漫画・ドラマから学ぶ－

前年度と同様に、漫画『日本人の知らない日本語』<sup>3)</sup>を自宅で読んでから、授業でそのドラマの DVD<sup>1)</sup>を視聴し、グループで討論を行った。

また、前年度と同様に、アルクの「日本語学校の授業をのぞいてみよう！」<sup>1)</sup>の映像を視聴した。

#### 4.7 年少者（児童・生徒）に対する日本語教育

三重県は、日本語指導が必要な児童・生徒の数が全国で6番目に多い<sup>10)</sup>。本教育学部の学生は、卒業後、小・中・高の教員になる者が多い。このことを考慮に入れ、2013年度もこの項目について、2回に分けて、講義を行った<sup>4) 6)</sup>。

さらに前年度と同様に、各授業の後半では、グループワークとして、外国人の子どもに語彙力をつけるにはどうすればいいか<sup>5)</sup>、国際教室を利用して、日本人児童と外国人児童の交流と異文化理解教育の場にするには、どんな工夫が必要かというテーマ<sup>7)</sup>で、討論をさせた。

#### 4.8 地域の日本語教室についての調査

2012年度は、実際に日本語教室に行かずに調べる学生が多かったため、2013年度は、必ず調査対象の日本語教室に行って調査することを義務づけた。調査項目は、前年度と同様の12項目である。また、分かりやすい口頭発表をするよう指示したため、全員がパワーポイントの資料か、レジュメを用意して発表した。

2013年度は、学生が日本語教室を実際に訪れて調査したため、何人かの学生は臨時の日本語教師を依頼され、調査するつもりが、教えることになったとか、日本語教室の行事に参加して、楽しかったというような報告があった。

#### 4.9 2013年度の授業の成果

前節でも述べたように、学生が授業の一環として全員で久居の日本語教室を見学しただけではなく、個人でも日本語教室を訪れたことは、学生の日本語教育に対する意識が高まったと言える。2013年度の本授業終了後に学生にアンケートを取った。すると以下のような結果が得られた。

表2：ボランティアの実施状況

|              | 三重県 | 愛知県 |   |
|--------------|-----|-----|---|
| ボランティアを始めた   | 3   |     |   |
| ボランティアを始める予定 | 2   | 1   |   |
| 検討中          |     |     | 3 |
| 予定なし         |     |     | 2 |

2013.10.10 現在

昨年度は、ボランティアを始めたという学生の話は聞けなかったが、2013年度は2~3人の学生が始めた、または始めたいという話を聞いたため、メールによって調査を行った。

この結果から、本授業が学生に与えた影響が、少なからずあったのではないかと考えられる。

## 5. まとめ

2012年度と2013年度に、筆者が担当した「日本語教育の現状と課題」という授業の実践について報告を行った。

日本語教育に関心がない、日本語教育について予備知識がない学生にも、楽しんで取り組めるように工夫したつもりである。座学の講義はできるだけ少なくし、見学や漫画の講読、テレビドラマのDVDの視聴、グループワーク、学生による調査・発表、討論などを取り入れた。社会がグローバル化し、日本も多文化共生の時代に入った。外国人は隣人として当たり前の存在となった。将来、日本語教師にならなくても、日本に住む外国人の問題には無関心ではいられない状況だといえるだろう。そのような現状の中で、学生たちが授業で取り上げた問題や、自分たちが実際に見聞きしたことをもとに、考えを深めてくれることを期待したい。

### 【参考文献】

- 1) 山脇啓造「6つのテーマで考えよう 日本語教育のこれから 政策と実践」『月刊 日本語』（アルク）第24巻11号、2011年11月号、2011
- 2) 今村和宏「日本語教育政策のマスタープランと国立日本語教育研究所」日本語教育政策マスタープラン研究会『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』（ココ出版）、2010
- 3) 蛇蔵&海野凧子『日本人の知らない日本語』（メディアファクトリー）、2009
- 4) 山田泉「年少者（児童・生徒）に対する日本語教育 1.児童・生徒の日本語教育」日本語教育政策マスタープラン研究会『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』（ココ出版）、2010
- 5) 山本忠行「外国人の子どもには、どのような語彙から教えたらいいのでしょうか。学校に関する言葉がいいのでしょうか。」河原俊昭・山本忠行・野山広編著『新時代教育のツボ選書2 日本語が話せないお友だちを迎えてー国際化する教育現場からのQ&Aー』（くろしお出版）、2010
- 6) 野山広「年少者（児童・生徒）に対する日本語教育 2.ダブルリミテッド問題と家族・学校・地域・行政の役割と責任」日本語教育政策マスタープラン研究会『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』（ココ出版）、2010
- 7) 宮崎幸江「国際教室を利用して、日本人児童生徒と、

外国人の児童生徒の交流と異文化理解教育の場に行き  
るように工夫するには、どうすればいいでしょうか。」

河原俊昭・山本忠行・野山広編著『新時代教育のツボ  
選書 2 日本語が話せないお友だちを迎えて－国際化  
する教育現場からの Q&A－』（くろしお出版）、2010

8) 川端一博「国内の日本語教育の現状」『日本語学』  
(明治書院) 第 32 巻第 3 号、2013

9) 野山広「地域日本語教育－その概念の誕生と展開－」  
『日本語学』(明治書院) 第 32 巻第 3 号、2013

### 【使用 DVD】

i) 「日本人の知らない日本語 Vol.1」『日本人の知らない  
日本語 DVD BOX』(バップ)、2010

### 【参考サイト】

I) 「日本語学校の授業をのぞいてみよう！ 東京中央  
日本語学院 (1/3)」

<http://www.youtube.com/watch?v=E8js9d9GVsY&list=PLh-bmzvNVPQTUbj5xf-kAjx00ASICuZW&index=1>  
ALC [www.alc.co.jp](http://www.alc.co.jp) 出版社アルク【alcmak 1】【日  
本語学校の授業をのぞいてみよう！】

<http://www.youtube.com/playlist?list=PLh-bmzvNVPQTUbj5xf-kAjx00ASICuZW> (2013.11.14 アクセス)

II) 文部科学省

「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査 (平成 24 年度) の結果について

[参考]①-1 日本語指導が必要な外国人児童生徒の学  
校種別在籍状況 (都道府県別)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/04/\\_icsFiles/fieldfile/2013/04/03/1332660\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/_icsFiles/fieldfile/2013/04/03/1332660_1.pdf)

(2013/11/13 アクセス)